八月七日初入贛過惶恐灘

紹聖元年（一〇九四）八月、五十九歲　恵州へ向う途中の作。

八月七日、初めて贛（かん）に入り、惶恐灘（こうきょうだん）を過ぐ

1　七千里外二毛人　　七千里外　二毛の人
2　十八灘頭一葉身　　十八灘頭（だんとう）　一葉の身
3　山憶喜歡勞遠夢　　山には　喜歡（きかん）を憶うて　遠夢を労し
4　地名惶恐泣孤臣　　地の惶恐（こうきょう）と名づくるは　孤臣を泣かしむ
5　長風送客添帆腹　　長風　客を送って　帆腹（はんぷく）を添え
6　積雨扶舟減石鱗　　積雨　舟を扶（ささ）えて　石鱗（せきりん）を減ず
7　便合與官充水手　　便（すなわ）ち合（まさ）に　官の与（ため）に水手（すいしゅ）に充（あ）てらるべし
8　此生何止略知津　　此の生（せい）　何ぞ止（た）だ　略（ほ）ぼ津（しん）を知るのみならんや

【語釈】○贛…川の名。江西省を南から北に流れ鄱陽湖にそそぐ。今は贛江と書き、コウ又はカンとよむ。○惶恐灘…贛江の上流、万安県から贛州（今の贛県）までのあいだ、難処が十八あると言い、万安県から遡るとき、最初の難処。惶恐はおそれ不安を感ずること。灘とは岩石の多い浅瀬の急流をいう。この文字を海上の難処に用い、〝なだ〟とよむのは日本だけの訓である。灘の正しい音はタン、慣用音ダン。○二毛人…二毛は頭髪がしらがまじりになること。人は作者自身。○一葉身…一葉は船のたとえ。○喜歡…蜀道の錯喜歡舗。○労遠夢…夢に遠い処を見るのは、魂が身を離れてそこまで行くのだとの考えによって労という。○石鱗…石上に泡立つ波。○水手…舟人。水先案内。○何止…不止と同じこと。…だけではない。○帆腹…帆が風をうけてふくらんだ形。

【解釈】都を去って七千里の路をゆく、頭には　しらががまじり、一ひらの木の葉に似た船に身を託し、十八灘の難処をこえんとはする。山を見ては錯喜歡の道を思い出して、遠い郷里に夢をはせ、惶恐灘の名を聞いては、この見すてられた官吏の涙は流れる。吹きわたる風は帆をいやがうえにふくらませ、旅人を送ってくれるし、降りつづいた雨の水かさは船をおしあげ、石の上のあわだつ波も数を減じた。これからは、私も役所に雇われる船頭にでもなってしまう運命ででもあろうか。一生のさすらいに、渡船場のありかを知っただけではすまないのだ。

中国詩人選集二集　蘇軾（下）小川環樹より抄出